



独立行政法人 労働政策研究・研修機構
主任研究員

下村英雄

キャリアコンサルティングと 歌声喫茶

木村周先生は、新宿に残る歌声喫茶に、今も足しげく通う。

私は20年ほど前にはじめて連れて行ってもらったが、その時の衝撃は忘れがたい。アコデオオンやタンバリンを持つリーダーが歌詞を先導し、店内にいる老若男女、障害者の方などゝもいて、みなで同じ歌を一齐に歌う。40年も50年も昔にタイムスリップしたかの光景に、私はすっかり飲み込まれた。店内で先生に買っていたいただいた歌本にも興味を惹かれた。革命歌や労働歌があり、ロシア民謡もあった。私は、歌の意味や背景をいろいろと調べ、いろいろなことを学んだ。

例えば、ロシア民謡「トロイカ」には、歌詞が二つあることをご存じだろうか。有名なのは「雪の白樺並木、夕日が映える」から始まる歌詞である。冬の夕方、軽やかに疾走する3頭立ての馬車の歌だと思われている。

しかし、この歌は、本来、馬車の手綱を取る若き駈者の嘆きの歌だと言う。この若者は、大好きだった恋人を金持ちの地主にとられてしまったのだ。「去年のことだよ、好きになったのは。そこへ地主の奴めが横槍を入れた。クリスマスも近いのに、あの娘は嫁に行く。金につられて行くなら、ろくな目にあえぬ。駈者は鞭持つ手で涙をおし隠し、これでは世も末だと悲しくつぶやく」これがトロイカの原曲の歌詞なのだ。

木村先生は、筑波大学を退官後、キャリアコンサルティング制度の整備と普及、確立に精力を傾けられた。その情熱は、この分野の金字塔たる著作「キャリアコンサルティング 理論と実際 4訂版」(雇用問題研究会刊)に結実している。

現在、キャリアコンサルティングには、多くの人が様々な思いで関わっている。ただ、根底には、職業や仕事に悩み苦しむ人を手助けしたいという思いが、均しくあるはずである。そして、そのさらに奥深くには、人々を苦しめる労働問題、社会問題への関心があつたはずだ。

金持ちの人間と貧しい人間がいて、そこにいかんともしがたい格差がある。無論、それを社会全体の問題だと言ってしまうは、まったくその通りだ。しかし、人は、ふつう、社会の矛盾をもっと具体的で個人的な問題として思っている。

トロイカの原曲の歌詞が悲しいのは、ひとえに娘が金持ちのもとへ走ったこと、おそらくはその娘も貧しく、それが金のためだったとしても致し方ないこと、そして貧しい自分には何もできず、全て飲み込んで娘を見送らざるを得なかったことによるだろう。

豊かさや貧しさの格差は、こうしてどこまでも個人的な問題として1人の労働者に感じ取られていく。キャリアアコンサルティングの本質とは、働く者が遭遇する社会の大きな矛盾や摩擦

を、あえて一人の個人の問題として引き受け、その解決の手助けをすることだと言えよう。

ただ、それゆえ、個人的な問題を、改めてその背後の労働問題、社会問題に還元し、捉え直していく視点も重要となる。個人の懊悩の背後に、根深く解きたい社会の問題が横たわっている。だから、キャリアコンサルティングに関心を持つ我々の実践は、日々、より大きな社会の問題に少しずつ関わっている。このことに常に自覚的である必要がある。

働くことに伴う様々な格差や不平等を強く意識し、それを是正する機能を強調する考え方こそ、今、先進諸国で盛んに論じられている「社会正義のキャリアガイダンス論」である。最近のトピックではあるが、50年前の歌声喫茶の頃から核となる部分は何ら変わっていないのだ。

ちなみに歌声喫茶で歌う木村先生の横顔は、必ずしも、酔客が楽しげに放歌するという印象を与えるものではない。木村先生はとても真剣に真摯に歌う。貧しい若者がいて、その夢がより良い社会に変革することだった時代、同じく青年だった木村先生も、あるいはその夢を共有したのかもしれない。その情熱が、歌にも、キャリアコンサルティングにも現れるのだと考えるべきであろう。

歌声喫茶で、万巻の書よりも多くのことを私は学んだように思う。